

原子力政策にストップを

JCO臨界事故 の実態に怒り

千葉市で講演集会

九月三〇日に茨城県東海村の民間ウラン加工施設JCOで起きた臨界事故から二ヶ月が経ちました。大量被爆した作業員は今も死線をさまよい、多くの人々は不安を抱いて生活していません。政府は、早々に「安全宣言」を出し、たいしたことはないかのように装っていますが、原子力、核が人類の手に負えないものであることが明らかになった今、私たちは核を拒否し、核武装準備をやめさせなければいけません。

事故の実態に背筋が寒く…

一月一四日に千葉市内で、慶応大学助教授の物理学者である藤田裕幸さんの講演集会が「戒厳令の夜」情報をもてあそび、被爆を強いる者は誰だ!」と題して開かれました。動力千葉からも一〇名が参加しました(うち家族会四名)。

目に見えない原子力、核の恐ろしさをあらためて知らされ、事故の実態を知れば知るほど恐ろしく、背筋が寒くなりました。藤田さんは事故の起きた二日間をテレビ局の報道センターに

いて事故と向き合ったというこ
とです。怒りをもって今回の事
故の問題点を話されました。

「戒厳令」と化した町

まず第一に、今回の核反応で
放出された中性子線とは、コン
クリート、鉄など、すべての建
造物を破壊せずに生体のみを殺
傷する放射能であることです。
中性子線を防ぐものは世界にも
ほとんどなく開発は難しいそう
です。

第二に、その中性子線が飛び
交う町で住民は恐怖に怯えなが
ら家に閉じこもり、政府からの
一方的情報を待たなければなら
なかったことです。明らかに戒
厳令であり、危機管理という名
の住民の管理が徹底して行なわ
れました。

被爆不可避の作業に

労働者を投入

第三に、現場の周辺は極めて
強い中性子線のため、本来人が
接近すべき場所ではなくなっ
ていました。それにもかかわら
ず、臨界を止めるのにJCOの職員
を突入させたことです。

「これは危険な作業だ。か
なりの被爆を覚悟しなければな
らない」「嫌なら断ることがで
きる」と言われたが、皆無言だ
った。(朝日新聞)

そして一〇組一八人が全員被
爆したのです。報告された個人
の被爆量は最大で通常の生活で
浴びる量の約百年分だそうです。
そしてこれだけの犠牲を払って
行なわれた作業内容は見通しの
ない行き当たりばったりの賭け
のようなものでしかなかったと
のことです。

重大な事実の隠蔽が

第四に、現場で中性子線測定
が始まったのは、事故発生から
六時間経過後であり、臨界継続
中という極めて重大な事実が長
時間にわたって国民の目から隠
されたことです。そのために住
民は、不要な被爆を強いられ、
これから生きていく限り被爆の
不安にさいなまれることになっ
てしまいました。

情報をもてあそび、生きて暮
らしている人々をなおざりにし
たことに怒りを禁じえないと訴
えていました。

第五に、これらの強い中性子
線を浴びて放射線物質と化した
住宅地の中の原子炉の撤去の問
題です。

事故発生は、会社が効率や経
済性を優先させ、安全手順を無
視して、労働者は危険性を知ら
されないまま起きてしまいました。
そしてまたこれからも大量
の労働者が「使い捨て労働力」
として動員されることは避けら
れず、このことに心を痛めてお

られました。

原子力政策にストップを

最後に、政府は「原子力災害
対策法案」の骨子を明らかにし
ましたが、そこには住民の安全
を守るという視点が全く欠落し
ており、防災に名を借りた治安
立法だということです。それは
日本を強力な国家にしようとし
る政府の一連の動きの延長線上
に位置づけることができると思
われました。

なんと恐ろしいことでしょう
か。私は仕事上、いつも子ども
に囲まれています。その笑顔、
泣き顔、遊ぶ姿の中において、と
ても幸せです。そんな子どもた
ちのためにも核を拒否して、原
子力政策をストップし、すべて
の核施設の機能を停止すること
を求めます。

(家族会 発)

おしらせ

家族会

第十二回定期総会

●二〇〇〇年三月二日